

1946年8月26日 第3種郵便物認可  
2016年7月1日発行（毎月1回1日発行）

SEKAI

岩波書店

2016

July

no.884

# 世界7

特集

## 非立憲政治を終わらせるために—2016選挙の争点

内橋克人 柄谷行人 大澤真幸  
中野晃一 田村洋三  
池田真紀 山本雅昭

インタビュー 熊本—地震と水俣と 石牟礼道子

沖縄—国家の暴力はやんでいない 目取真 俊  
ガルブレイス没後10年

—歴史に残る社会科学者の条件 伊東光晴 × 中村達也



# 特集 非立憲政治を終わらせるために——2016選挙の争点

**世界の潮** ハンセン病患者「特別法廷」最高裁はなぜ違憲判断を避けたか 藤野豊  
躍進を続けるスコットランドの地域改変 SNPとEU国民党のゆくえ 山崎幹根  
フィリピン ドゥテルテ新大統領誕生の意味 加治康男  
遺伝子組み換え産業に変調? 印鑑智哉

市民革命の好機

安倍政治の真実

参加型の選挙へ

市民の政治のつくりかた 野党共闘・北海道5区補選の記録

市民参加のカラフルな選挙で変えていこう

対談 法曹の矜持

報告 新安保法制法は違憲である

連載 政治利用を超えて

辺野古 国家の暴力はやんていない

山口二郎のムホン会議 第4回自発的隸従の鎖を断ち切る「小さな揺らぎ」

被災地に「住まいの再生」を

水俣病はなぜ終わらないのか(上) 高齢化する患者、患者切り捨てを続ける行政

ヨーロッパを覆う新たな「鉄のカーテン」

終わりゆく帝国と「第一のプラザ合意」

解題「吉田調書」 第13回 所長命令に違反 原発撤退1

事故30年 チェルノブイリからの問い 第3回 事故収束作業員はいま

東日本大震災から五年 覚醒して本当に議論すべきこと

世界は長期停滞から抜け出せるか

ローレンス・サマーズ(ハーバード大学教授)、聞き手=D・スマック(金融コンサルタント)、訳・解説=山本俊明(時事通信)

パナマ文書事件 国際鍊金術師の影

歴史に残る社会科学者の条件 伊東光晴(京都大学名誉教授)×中村達也(中央大学名誉教授)

ポスト・オリンピックの社会のために 「横グループ」は何をどう問題にしてきたか

検証 新国立競技場問題 没後20年対談

インタビュー ガルフライズ 金融資本の悪行

藤野豊 山崎幹根 加治康男 印鑑智哉

地震と水俣病

熊本 地震と水俣病

# 問題 國立競技場新設 検証



## ポスト・オリンピックの社会のために

「横グループ」は  
何をどう問題にしてきたか

—約一年前の二〇一五年七月一七日、安倍首相は新国立競技場計画を「ゼロベースで見直す」と表明しました。

その後、見直しに至った経緯の検証作業と並行してつくられた新整備計画のもと再コンペが行なわれ、一二月に設計・施工業者が決定しました。今年四月には選び直しどういった公式エンブレムも決まりましたが、新たに東京招致に関する不正送金疑惑が浮上する

など、何のための五輪なのか、そのビジョン

は依然として見えないままのようを感じます。

本日は、新国立競技場計画について具体的

な提言を重ねてきた建築家の横文彦さん、中

村勉さん、大野秀敏さんの三人にお話を伺い

ます。白紙撤回までの幾つかの節目、そして、これまで一体何を問題にされてきたかを振り返っていただきことで、それらの論点を未来にどう活かしていくか、考えたいと思います。

建築は、実際に目の前に現れなければ、図面からその大きさをイメージするのが難しいところがあります。エッセイをまとめるなかで考えていたのは、普通の人々の多くは、この案にどんな問題があるか

### 何が誤りの始まりだつたか

—最初に横さんから、日本建築家協会の機関誌『JIA MAGAZINE』二〇一三年八月号に発表されたエッセイ（「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える」）の要点を、改めてご紹介いただけますか。

横 国際コンペの結果、二〇一二年秋に発表された新国立競技場案は、一言でいえば、敷地に対してオーバーサイズでした。

ただ最終審査に残った他の案を見ても、高さや地上容積率などは同じコンペのプログラムに従っていますから、いずれもそれなりに大きいのは事実です。一次審査のパース（完成予想図）で、競技場へのアプローチが首都高やJR線をまたいでいた当選案ほど巨大には見えませんが。

建築は、実際に目の前に現れなければ、図面からその大きさをイメージするのが難しいところがあります。エッセイをまとめるなかで考えていたのは、普通の人々の多くは、この案にどんな問題があるか

計画白紙撤回後の2015年7月30日、港区の国際文化会館で記者会見する横グループのメンバー（左から2人目より中村氏、横氏、大野氏）。

世界 SEKAI 2016.7

建てるまでわからないとすると、まず景観上の問題——地上を歩く人からどんなふうに見えるかとか、安全上の問題——たとえば八万人の観客が避難する場合、うまく処理できるのかどうかに触れておかなければならないということでした。

既にお話ししてきたように、私は一九八四年、国立競技場と隣接する土地にある東京体育館の設計作業に着手しました。その際、最大高さは三〇メートル、建替え前の建築の地上容積を超えてはいけない、また隣の新宿御苑から樹立を越えて体育館の屋根が見えるのは好ましくないなど、東京都から非常に厳しい条件を与えられました。このときの経験もあって、当選案の容積や高さが新宿御苑、聖徳記念絵画館など周囲との関係を無視していることに驚いたのです。

エッセイでは、コンペのプログラムとして示された面積の大きさ、高さ、外部空間の狭さなどの問題を指摘し、こう述べています。まず、この敷地により相応しい、新しいプログラムを作成することが

もともとプログラムが大きかった。デザイナーの評価以前に、プログラムに本質的な欠陥があると指摘したことが、一つ大事なポイントだと思います。

楳 いまはコンペのプログラムづくりにあたって市民の声を聞く自治体もかなりあると思います。それは、政治にとって保険でもあるからです。首長にしろ、地方議会の議員にしろ、選挙の時に「なぜあんな無駄遣いを」と言わると大きなマイナスになります。ですからその点は非常に慎重で、私も市庁舎などを手がけたとき、長い時間をかけて市民の意見を聞いた経験があります。

大野 そうですね。地方自治体は国と比して予算執行が身近で、その分、意識も高いです。

楳 一方、国の事業の場合、地方政治のようなプレッシャーはあまりないわけです。ではどうしているかというと、有識者会議が多く用されます。安全保障政策についても憲法の問題にしても、有識者会議から出てきたものがかなりの権限をも

必要である。そしてそれをコンペにする時間的余裕がなければ、一つのオプションとしては、先のコンペの当選者に敬意を表し、ザハ・ハディド氏と二〇一二年ロンドン五輪のメイン・アリーナを担当した競技場専門建築事務所との協同によるロンドン・チームが考えられる——と。

というのは、ロンドンのスタジアムでは、当初、観客席は本設二・五万人、仮設部分五・五万人と計画されていたので、一方、新国立競技場のプログラムは、八万人の観客を収容する恒久施設を要求していました。サッカーW杯の開催基準を考慮した結果と聞きましたが、狭小な敷地と周辺地域の特性を考えたとき、八万人収容の恒久施設をつくることが本当に合理的でしょうか。エッセイを書いた二〇一三年夏の時点では、まだ古い競技場がありましたから、恒久施設は既存の建築物程度の五・五万人分として、残りは仮設にしたらどうかと申し上げました。

大野 楠さんの話の中に、プログラムという用語がありました。建築関係者以降請求でオーブンになつた議事録によれば、事業主体となるJSC（日本スポーツ振興センター）の河野一郎理事長（当時）は、第一回有識者会議の冒頭説明で既に、収容人数は「八万人がスタートライン」、「全天候型スタジアムも要検討」と示していました。

中村 プログラムとの関わりで補足しますと、有識者会議のもとに三つのワーキンググループ（WG）がありました。そのうち、他の二つのグループの意見を整理しながら、競技場の設備と規模を検討した中核組織が「施設建築WG」です。有識者会議で建築の専門家は安藤忠雄氏一人でしたが、このWGのメンバーは、

外にはコンペとの関係がわかりにくいかかもしれませんので、少し整理しますと、建物を設計するためには、敷地は何平方メートルで、予算はいくらで、中に何を入れるのか、あれこれ決めなければいけない。それを建築設計界ではプログラムと呼んでいます。

公共建築の設計者をコンペ形式あるいはプロポーザル形式で決める、要するに公募して決めることは、一九九〇年代の意味で、一昔前と比べれば設計者選定プロセスの公開性はずいぶん高くなっています。しかし、プログラムを決める過程は、特に国の施設では、いまもほどんど公開されません。多くの場合、行政内部で決められたものが条件として建築家に提示され、それに対する設計案を出すケースが多いと思います。

楠さんは、当選案が「大きすぎる」と言われたわけですが、もちろんザハ・ハディド氏が大きくなったわけではなくて、

彼をはじめ皆さん関連分野の専門家で、コンペの審査員も務めています。

安藤氏は、白紙撤回となる日の前日に記者会見を開いて、「頼まれたのはデザイナーの選定まで」と説明していました。しかし実際には、コンペの審査委員長であると同時に、施設建築WGの座長として必要な設備や条件を検討する立場にありました。現にこのWGの第一回会合で安藤氏は、「千駄ヶ谷駅から歩いてきますと、相当な大きさ」「周辺は全体のバランスがいい公園」「これだけ大きなものが入るのか」とスケールに関する意見を述べています。また第二回では、他の委員から、会合での意見を「全部単純に加算していくと、規模的に不可能」との声も上がっていました。ところが、WGでプログラムは何度か練り直されているものの、これらの意見がより大きな議論につながることはありませんでした。

大野 工事額がなぜ増えたかについては後でも触れたいと思いますが、その理由の一つは、バンケット会場や博物館や

駐車場などの付帯設備が盛りだくさんだ

ということに加えて、陸上競技、球技、音楽興業と共に存の難しい三つの機能を一つの施設でこなそうとしていたからです。

最近の音楽業界ではCDなどの売上げが落ち、収入源としてライブパフォーマンスの比重が高まっているそうです。だから、都心に大物アーティストの公演ができる場所がほしい、さらに、最大のリスクである雨天中止を避けるためには屋根があるとなお良いとなる。一方、球技場としては天然芝が必要ですが、芝の生育には日当たりと通風が欠かせません。それで今度は屋根を開閉できるようにしたいという声が上がるわけです。

サッカー関係者などからすると、球技観戦には陸上トラックが邪魔になるので、トラックの上にも可動席を設けたい、となる。そうやって多目的化に伴って、機械設備類みの方向に傾斜してしまった。

中村 河野理事長は、やはり第一回会議の挨拶で、「多様な利活用形態によつて『稼げる』スタジアムに」とも言つて

楨 それから、たびたび指摘されたように、神宮内苑・外苑一帯は風致地区第一号となつたところですが、プログラムには敷地周辺の歴史的、地形的説明がほとんどありませんでした。

大野 風致地区指定のように、都市の自然を守るとか、住環境を守るとか、景観のために適切な制限をかけるのが、都市計画の大きな役割です。そして異なる人びとの利害や期待を調整し、都市の向かうべき方向を示すのが都市計画家の仕事です。プログラムがつくられる時点で、その役割がもっと果たされなくてはならなかつたと思います。

中村 コンペでは、施設の最大高さを一五メートルから七〇メートルに変更することが前提とされていました。実際に、施設建築WGの会合、また有識者会議では、副知事や都の技監が、都市計画審議会での承認を見越したような発言をしていました。しかし、この規制緩和が実際に承認されたのは、二〇一三年五月に開かれた東京都の都市計画審議会の場です。渋谷

いましたね。

大野 こうした多機能施設は、建設費と維持費がかさむ割に機能が中途半端になりますが、世界の潮流は高水準の単機能施設に向かっています。

## 都市計画の視点は活かされたか

——楨さんたちがグループとして動き始めたのはいつからだったのでしょうか。

楨 エッセイを発表した後、「自分たちも何かしなくては」と言って、議論をさらに深めていくためにシンポジウムを企画してくれた人たちがいました。楨事務所OBの元倉真琴さん、山本圭介さん、

ここにおられる中村さん、大野さん、それからエッセイを発表した当時の『JA MAGAZINE』編集長だった古市徹雄さんにも加わっていました。二〇一三年九月初めに楨グループができました。

その後、ブエノスアイレスでのIOC総会で東京開催が現実のものとなります。そこから、本当にこういう競技場がつくられるのかとメディアでも意見が

出始めたわけです。  
翌一〇月に行なわれた日本青年館でのシンポジウムでは、先のメンバーのほか、建築史家の陣内秀信さん、社会学者の宮台真司さんがパネリストとして参加されました。このとき、私が最初のエッセイで書いた以上に、社会的な、あるいは都市計画上の問題があるとそれぞれの方が発言されたように思います。大野さんも、

都市計画面で発言されましたね。建築関係者も含めて、皆ハディド氏の建築に目が向いていましたが、先ほどのプログラムの問題は、都市計画のレベルでも大きな問題であることを伝えたかったのです。

まず大規模イベント会場の設計において、安全上の配慮は最も基本的な事項の一つです。しかし、コンペのプログラムどおりにつくると敷地が建物でいっぱいになってしまいます。わずかな周縁部に、はたして八万人の観客がいっせいに避難するスペースを確保できるのか。これは建築家が幾ら工夫しても解けない問題です。

これまでの案を縮小した「基本設計案」が公表され、有識者会議で了承されます。前年秋に、設計者が三〇〇〇億円に達する工事費の試算を出したと報じられるなど(二〇一三年『毎日新聞』一〇月一九日付)、計画への批判がいっそう高まっていたので、規模やコストを見直した案がつくられたわけです。

大野 コンペで示された建設予算額は一三〇〇億円でした。世界の歴代オリンピック終了後も、国民、都民から親しまれ、将来の世代からも賞賛されるために、計画条件を根本から見直してほしい」、そ

の意見も十分に議論されることなく、「他にご質問、ご意見は……」となつて淡々と了承されています。有識者会議も都市計画審議会も、非常に形式的なものだったといえると思います。

大野 いま述べてきたような都市景観上、安全上、そして維持管理費用に関する懸念があるとして、シンポジウム後の一一月、建築家や文化人の方、全部で約一〇〇〇人の方から賛同を得て、文科省と都に要望書を提出しました。「オリンピ

ック終了後も、国民、都民から親しまれ、将来の世代からも賞賛されるために、計画条件を根本から見直してほしい」、そ

う述べて検討事項を挙げました。

中村 要望書への直接的な回答は得られませんでしたね。

と取り組んだ分析を通して、大ざまに言って三、四のテーマが浮かびあがってきました。中でもキールアーチの構造、ドームの開閉式遮音装置の問題は、計画全体を象徴するものだったと思います。

たとえば、槇さんが「2LDKが入るサイズ」と言っておられた断面面積八〇平方メートル、幅四〇〇メートルのキールアーチが本当にあの高さで建築として成立するのか。友人の構造家に話を聞くと、建築のアーチのスパンとしては前例がないだけでなく、幅に対して高さが低いので、地震の際には長周期振動による揺れが止まなくなるのではないかと懸念していました。

槇 開閉式遮音装置のほうは——JSCは、基本計画案の公表以降、開閉屋根のことをこう言い換えたのですが——、ねじれた鞍型をした三次元曲面のデザインでした。日本の他の例を調査すると、屋根のある豊田スタジアムも大分銀行ドームも、おおむね二次元的な動きです。それでも不具合が起きて、豊田では二〇えて、フローの成績はよくなる。大規模修繕が必要なときがきたら、国会にお願いして予算をつけてもらえばいい。そうした発想で、際限なく無駄遣いをするメカニズムができています。

他方で、根本祐二さんが『朽ちるインフラ』(日本経済新聞出版社、二〇一一年)で指摘されたように、戦後に整備された社会資本は、更新投資の必要な時期を迎えている。実際、橋やトンネルの天井板が崩落する事態が起きています。メンテナンスだけでも公共施設に関係する支出がいつそう増えていくということです。さらに人口減少と高齢化による歳入減・歳出増を考慮すれば、過剰な公共施設をつくっている場合でないのは明らかです。

招致キャンペーンでは「コンパクト五輪」をアピールしていましたが、政府は「地方創生」も打ち出しています。都心への一極集中がこれ以上加速しないよう、埼玉や横浜の大規模競技場を活用するこ

とだつて考えてもよいはずです。

一五年四月に運用を停止しています。大部分は年間稼働日数が新国立競技場での想定の半分だったにもかかわらず、天然芝の管理に今も苦戦しているそうです。アーチや開閉式遮音装置、あるいは芝生の育成などが技術的に可能かどうか、検証もしないで突き進んでいることが窺えました。コストの問題もそうです。未証のテーマを幾つも抱えたまま案が承認され、莫大なお金が投じられようとしていた。これには強い危機感を持ちました。レイテ沖海戦で十分な情報も戦略もないまま武藏を投入して沈ませた、そういう参考本部的なメントリティが七〇年後にもまだ残っていたのだと思いました。

大野 それから收支計画では修繕維持費の問題が特に大きいと思います。JSCは後の説明会で今後五〇年間にかかる維持費は建設費の四〇%、年間コストは一四・一億円と計上していると回答しました。ところが、そこには大規模修繕の費用は含まれていません。大規模修繕費用は含まれていません。

槇 多摩ニュータウンの複合文化施設「パルテノン多摩」も、築約三〇年で老朽化が進んで、当時の建設費に近い額を改修費用として負担しなければ、維持できなくなっているそうです(『朝日新聞』二〇一六年三月二七日付)。こうした例は今後にもまだ残っているのだと思います。

大野 本来、公共事業はそもそも元をとれるものではなかったのですが、中曾根内閣以来の「民活」路線では、公共事業にも採算性を求めるようになりました。そこにはねじれが生じていきます。今回のケースでも、もはや公共施設というより、興行場に近い。JSCからすれば、施設を立派につくればつくるほど売上げが増加します。

上は最高の仕事をさせる、ザハ生涯の傑作をなんとしても造らせる、というのが座敷に客を呼んだ主人の礼儀」と述べています。

槇 JSC側が最初に五会と話をする場を設けたのは、これで建築界のお墨付きを得たことにしてかかったからでしょう。発注者側は、有識者会議、都市計画審議会、それから業界のトップとの集まりで手続は済んだとして肃々と計画の実現に向かっていく。これは業界、学界、行政の関係の一つの典型例です。

中村 実は、この説明会には前段があくばらんな議論をと言なながら、あくまでなしの心」で日本の技術を結集して五輪を成功させよう、ザハ・ハディド氏に対しても失礼ではないか——そうした姿勢に終始している印象でした。施設建策WGの委員であった内藤廣氏は、二〇一三年一二月に発表した「建築家諸氏へ」というメッセージで、「決まった以

を入れた試算では、五〇年間で建設費の一〇〇～一五〇%の費用がかかると予測されます。この收支計画の黒字は役所用語です。JSCは初期の收支計画では年間四億円の黒字と説明していました。しかし、それはフローだけの採算性です。民間の事業のように減価償却費を含むと、当然赤字になる。

槇 多摩ニュータウンの複合文化施設「パルテノン多摩」も、築約三〇年で老朽化が進んで、当時の建設費に近い額を改修費用として負担しなければ、維持できなくなっているそうです(『朝日新聞』二〇一六年三月二七日付)。こうした例は今後にもまだ残っているのだと思います。

大野 本来、公共事業はそもそも元をとれるものではなかったのですが、中曾根内閣以来の「民活」路線では、公共事業にも採算性を求めるようになりました。そこにはねじれが生じていきます。今回のケースでも、もはや公共施設というより、興行場に近い。JSCからすれば、施設を立派につくればつくるほど売上げが増加します。

上は最高の仕事をさせる、ザハ生涯の傑作をなんとしても造らせる、というのが座敷に客を呼んだ主人の礼儀」と述べています。

槇 JSC側が最初に五会と話をする場を設けたのは、これで建築界のお墨付きを得たことにしてかかったからでしょう。発注者側は、有識者会議、都市計画審議会、それから業界のトップとの集まりで手續は済んだとして肃々と計画の実現に向かっていく。これは業界、学界、行政の関係の一つの典型例です。

中村 実は、この説明会には前段があくばらんな議論をと言ながら、あくまでなしの心」で日本の技術を結集して五輪を成功させよう、ザハ・ハディド氏に対しても失礼ではないか——そうした姿勢に終始している印象でした。施設建策WGの委員であった内藤廣氏は、二〇一三年一二月に発表した「建築家諸氏へ」というメッセージで、「決まった以

入れた試算では、五〇年間で建設費の一〇〇～一五〇%の費用がかかると予測されます。この收支計画の黒字は役所用語です。JSCは初期の收支計画では年間四億円の黒字と説明していました。しかし、それはフローだけの採算性です。民間の事業のように減価償却費を含むと、当然赤字になる。

槇 多摩ニュータウンの複合文化施設「パルテノン多摩」も、築約三〇年で老朽化が進んで、当時の建設費に近い額を改修費用として負担しなければ、維持できなくなっているそうです(『朝日新聞』二〇一六年三月二七日付)。こうした例は今後にもまだ残っているのだと思います。

大野 本来、公共事業はそもそも元をとれるものではなかったのですが、中曾根内閣以来の「民活」路線では、公共事業にも採算性を求めるようになりました。そこにはねじれが生じていきます。今回のケースでも、もはや公共施設というより、興行場に近い。JSCからすれば、施設を立派につくればつくるほど売上げが増加します。

上は最高の仕事をさせる、ザハ生涯の傑作をなんとしても造らせる、というのが座敷に客を呼んだ主人の礼儀」と述べています。

槇 JSC側が最初に五会と話をする場を設けたのは、これで建築界のお墨付きを得たことにしてかかったからでしょう。発注者側は、有識者会議、都市計画審議会、それから業界のトップとの集まりで手續は済んだとして肃々と計画の実現に向かっていく。これは業界、学界、行政の関係の一つの典型例です。

中村 実は、この説明会には前段があくばらんな議論をと言ながら、あくまでなしの心」で日本の技術を結集して五輪を成功させよう、ザハ・ハディド氏に対しても失礼ではないか——そうした姿勢に終始している印象でした。施設建策WGの委員であった内藤廣氏は、二〇一三年一二月に発表した「建築家諸氏へ」というメッセージで、「決まった以

れ、私は三八項目にわたる質問書を提出しました。質問内容は横グループの討議で組み立てたものでしたが、それまでの横グループでのヒアリングや調査を踏まえて、当時の基本計画案では工事費は約二〇〇億円にのぼる可能性がある——これは、後から二五〇〇億円に上方修正するのですが——工期も日産スタジアム（横浜国際総合競技場 七万二〇〇〇人収容）と同じ四二カ月では不可能で、五〇カ月はかかるのではないかと指摘しました。

この会合のことでよく覚えているのは、前日に千葉で痛ましい事件が起きて、会合が行なわれた自民党本部に右翼の街宣車が来ていたことです。県営住宅の退去を迫られたシングルマザーのお母さんが、中学生の子どもを殺してしまったという。「こういう社会にしたのはお前たちだぞ」、そういう怒鳴り声が外で響いていました。一方、会合ではコンペの技術調査員を務めた元日本建築学会会長の和田章氏が、工事費のことを「一七〇〇（億）とか、一九七一（億）とかいうお金はたしかに」とです。おそらく、両者を分けたのは、期限通りに要件に合ったスタジアムができるかどうか、事業主体の側に心配があったので、能力のありそうな日本の設計者を選定したということなのでしょう。

コンペの要項では、監修者に、設計者がデザインの意図を十分に反映しているかをチェックし、必要な場合、修正の提案を行なうといった強い権限を与えていました。しかし、設計者・監修者の違い、上下関係などの内容はもとと明確であるべきだったし、両者の役割について徹底した話し合いがあつて、そのあと契約するのが本道だったと思います。事実、検証委員会の報告書では、当初は役割分担が不十分だったために監修者と設計者の双方で近い内容の作業が行なわれ、設計作業の完了時期が遅れたとありました。

そうしたあまり前例のない体制をとつたとはいって、フレームワーク設計、基本設計、さらに実施設計まで進めていたところに、今度はECI方式を導入するとこいつ。最初に聞いたとき、非常に不思議

大金ですけれども、……オリンピックになりました。質問内容は横グループの討議で組み立てたものでしたが、それまでの横グループでのヒアリングや調査を踏まえて、当時の基本計画案では工事費は約二〇〇億円にのぼる可能性がある——これは、後から二五〇〇億円に上方修正するのですが——工期も日産スタジアム（横浜国際総合競技場 七万二〇〇〇人収容）と同じ四二カ月では不可能で、五〇カ月はかかるのではないかと指摘しました。

この会合のことでよく覚えているのは、前日に千葉で痛ましい事件が起きて、会合が行なわれた自民党本部に右翼の街宣車が来ていたことです。県営住宅の退去を迫られたシングルマザーのお母さんが、中学生の子どもを殺してしまったという。「こういう社会にしたのはお前たちだぞ」、そういう怒鳴り声が外で響いていました。一方、会合ではコンペの技術調査員を務めた元日本建築学会会長の和田章氏が、工事費のことを「一七〇〇（億）とか、一九七一（億）とかいうお金はたしかに」とです。おそらく、両者を分けたのは、

期限通りに要件に合ったスタジアムができるかどうか、事業主体の側に心配があったので、能力のありそうな日本の設計者を選定したということなのでしょう。

大野 施工の仕組みについて簡単にお話しますと、公共工事の場合、原則として設計と施工は分離して、設計の仕様書に基づいて入札で施工業者を決めます。それを前倒しして、設計段階から施工業者の意見を取り入れようというのがECI（Private Finance Initiative）、デザインビルド、色々な形で設計と施工を合体させる動きが世界的に見られます。

横 たとえばもしも自分が設計者で、作業途中で施工者が入ると言われたら、やつぱり、我われのやっていることを信頼していないんですか、というのが正直な感想だと思います。検証委員会の報告書によれば、導入を決めた後で想定外に時期が遅れたとのことでしたが、ECI方式が示された時点では技術的な積み残しがあったのか。それを発注側、設計側はどう認識していたのか、知りたく思います。

横 たとえば高度な施工技術が必要で、設計サイドだけでは対応できないとか、プロジェクトの規模が大きいときに予算や工期を確定なものにしたいとか、それぞれに動機があつて、単純に何が良い悪いとは言えません。ただ今回は、日本側にサポートする設計チームがあつて、そのうえコンストラクション・マネージャーにあたる業者もいて、充実した体制をとつていた。そこにさらに建設会社の支援を得るということですから、やっぱり不思議というほかないですね。

題を先送りし続けているわけです。

## 設計・施工体制とマネジメント

——JSCは非公開で専門家に対する説明会を開く一方、二〇一四年八月には、ECI（Early Contractor Involvement）といわれる新しい入札契約方式で施工予定者を公募すると発表しました。

これはどんな方式だったのでしょうか。

横 施工の話に入る前に、まず設計の体制を見ておく必要があると思います。

今回、特殊だったのはコンペで「設計者」ではなく「監修者」を選んだ点です。つまり最優秀賞に輝いたザハ・ハディド・アーキテクツはデザイン監修にあたり、設計は、公募で日建設計・梓設計・日本設計・アラップの四社による設計共同体（JV）に委託されました。先ほど状況で八万人規模の施設の需要が本当にありますのか。アスリートファーストどころか、建設需要ファーストで、本質的な問

題を先送りし続けているわけです。

大野 施工の仕組みについて簡単にお話しますと、公共工事の場合、原則として設計と施工は分離して、設計の仕様書に基づいて入札で施工業者を決めます。それを前倒しして、設計段階から施工業者の意見を取り入れようというのがECI（Private Finance Initiative）、デザインビルド、色々な形で設計と施工を合体させる動きが世界的に見られます。

横 たとえば高度な施工技術が必要で、設計サイドだけでは対応できないとか、プロジェクトの規模が大きいときに予算や工期を確定るものにしたいとか、それぞれに動機があつて、単純に何が良い悪いとは言えません。ただ今回は、日本側にサポートする設計チームがあつて、そのうえコンストラクション・マネージャーにあたる業者もいて、充実した体制をとつていた。そこにさらに建設会社の支援を得るということですから、やっぱり不思議というほかないですね。

横 たとえば高度な施工技術が必要で、設計サイドだけでは対応できないとか、プロジェクトの規模が大きいときに予算や工期を確定るものにしたいとか、それぞれに動機があつて、単純に何が良い悪いとは言えません。ただ今回は、日本側にサポートする設計チームがあつて、そのうえコンストラクション・マネージャーにあたる業者もいて、充実した体制をとつていた。そこにさらに建設会社の支援を得るということですから、やっぱり不思議というほかないですね。

横 たとえばもしも自分が設計者で、作業途中で施工者が入ると言われたら、やつぱり、我われのやっていることを信頼していないんですか、というのが正直な感想だと思います。検証委員会の報告書によれば、導入を決めた後で想定外に時期が遅れたとのことでしたが、ECI方式が示された時点では技術的な積み残しがあったのか。それを発注側、設計側はどう認識していたのか、知りたく思います。

横 さらにこの四社連合の設計者が本当に設計者として適切な助言、報告を——特にコスト、スケジュール、あるいは技術上の問題に関して——JSCや監修者に行なつてきたのか、私は疑問をもっています。

中村 二〇一四年五月に基本計画案を出して、JSCがECI方式で竹中工務店・大成建設を施工予定者に選んだのが一二月。それまで約七カ月間ですね。

横 先ほど触れたように、その間に横グループでは同規模の日産スタジアムで工期とコスト、大分銀行ドームと豊田スタジアムで開閉式屋根、味の素スタジアムで

芝生、大阪ドームで騒音、札幌ドームで主に維持費について分析を行ないました。それらを三八項目の質問として提出していましたが、やはり明確な回答はありませんでした。もしかすると設計の現場では、もうこれ以上答える状況ではありません。あるのではないか、私はそういう感触をもっていました。

またECI方式の施工予定者は、様々な施工方法を確立するために、かなりのシミュレーションをする必要があると主張し、そのための見積りを出したものの、JSCはその十分の一のみしか認めず、必要とされるものが結果的に先送りされることとなつたそうです。その話を聞いたとき、検証の終わつてない段階では、施行者もコストや工期に対する請負責任を負わされる請負契約はできる状況になつたろうと悟りました。既定路線で進むことが確認された七月七日の有識者会議後も、まだ望みは持ち続けていたのです。

（笑）もう一つ、重要なのは、基本計画案の予算です。二月に選定され

の中核であると話をしたら、その比較がわりとわかりやすかつたようですね。「キールアーチ」という言葉が受けたのか（笑）、浸透した気がします。

中村 二〇一四年後半からマスコミの疑問や批判の声が大きくなつてましたが、この記者会見の後からは特に、保守的だったのもマスコミ各社の支援が大きかつたと思います。

（笑）新たな提言のあと、六月一八日に下村文科大臣と次官の方に大野さんと私が呼ばれ、そこで我われはラグビーW杯代案でやり直す時間はありますと申し上げました。その代案というのはキールアーチをやめ、また開閉式屋根のないデザインとすることです。その後、大臣はこの案を官邸に持つていかれた。しかし、この時は官邸預かりとされ、一旦は、旧来の計画を維持して実施する方向が固められます。

中村 事費三〇八八億円、さらに工期もラグビーW杯には間に合わない旨をJSCに報告していたそうです。その後、文科省にJSCはその基本計画案で突き進んだことで全体の破綻に至つたわけです。

（笑）中村 予算の問題にせよ、ECI方式にせよ、日本の設計JVが何の反応も示してこなかつた点も謎が残ります。JSCはザハ・ハディド事務所に総額で約一三億円、日本の設計JVに約三六億円を支払っています。一般的には、ザハ・ハディド事務所が設計の「当事者」「責任者」として認識されてきたと思いますが、設計JVも、もちろん対価を得て公共事

二九日、五輪組織委員会の調整会議で、大臣は建設費二五二〇億円とする見直し案を報告しました。完成予定期は二ヶ月遅れる、だがラグビーW杯には間に合わせるとの内容でした。その後七月七日の有識者会議でも案が了承されています。

（笑）中村 この有識者会議の直後、七月九日にJSCは施工業者と約三三億円の契約を結んでいます。スタンダードなどの工事を請け負う大成建設に一部資材を発注する内容です。また、これまで競技場問題

の担当は文科省の下村大臣でしたが、六月二五日には、オリンピック・パラリン

ピック担当大臣に遠藤利明議員を据えた。

（笑）中村 の白紙撤回に至る重要な提言だったと感謝されました。

（笑）中村 ともかくも計画は白紙となつたので、

（笑）中村 横 もう一度メディアに対して、我われのアイディアとして、キールアーチと可動式屋根の中止、観客席のみの屋根にす

ること、そして規模を縮小して、ラグビーW杯での使用を諦めるなら今からでも

一〇〇〇億円以内で競技場をつくり上げることは十分に可能であると、技術的な検討を改めて説明しました。

## 「白紙撤回」直前の提言

（笑）中村 大野 工期からしても、見直しに向けた最後のチャンスだということで、二〇一五年の六月五日、横事務所で記者会見を開いて横グループの代替案について説明しました。基本設計案の構造形式と、人ひとの関心が一気に高まりました。

（笑）中村 大野 工期からしても、見直しに向けた最後のチャンスだということで、二〇一五年の六月五日、横事務所で記者会見を開いて横グループの代替案について説明しました。基本設計案の構造形式と、人ひとの関心が一気に高まりました。

（笑）中村 横 業に携わっていたわけです。

（笑）中村 横 そうですね。のちに白紙撤回の決断がなされたとき、ザハ・ハディド氏は安倍首相に直接手紙を書いていました。事務所としての立場も幾度か表明していました。ところが、日本側の設計者は悲しんでいるのか喜んでいるのかもわからぬ。実際の設計にあたつた四社JVにも、社会に対する説明責任があるはずです。

## あいまいな「第二幕」のスタート

（笑）中村 全体の検証として真っ先に思い浮かぶのは、プロジェクトを統括しているので、これ以上ここでマイナスをや

るプランナーは誰だったのか。結果的に官僚の人たちは一体何をしたのか。設計者の中でも、誰が実質的なプロジェクトマネージャーなのか。一貫して、全体のマネジメントを行なう人間がいなかつたことです。それは白紙撤回以降についても言えます。聖火台がプログラムに入つていなかつた騒ぎもありましたが、そもそも新しいプログラムを誰がつくったのか、具体的にはわかりません。

**榎 遠藤大臣**は七月末よりアスリートやジャーナリストの方など大勢を呼んで話を聞いていました。我われも先ほどの提言をお伝えしましたが、結局、「この辺でコンセンサスですね」とあいまいな形で第二幕に入ることになったと思います。どんなプログラムにすべきかは、本質的には複雑なことではないはずです。三年前のエッセイでも申し上げたように、第一にポスト・オリンピック——五〇年後の東京のこの地域にふさわしいスケールと内容をもつた施設を、と言えば、それだけで日本らしさとかスケジュールと

スだつたのに惜しいことをした、そう考えている建築家もけつこういると感じました。議論の矮小化というか、限られた領域にしか興味をもてなくなるのも、ムラ特有の関心の持ち方の一つでしょう。でも、専門家だったら三〇〇〇億円の予算といわれたときの妥当性にも目を向けて欲しい。最初に申し上げたように一〇〇〇億円あれば、立派な競技施設ができるわけです。たとえば、いま問題になっている保育士給与引き上げのために必要な国の緊急予算は今年度で五〇〇億円しかありません。新国立競技場の建設費は、やつぱり半端な額ではないんです。

**榎** 今さら言つても意味のないことですが、たとえば構造界から「このキールアーチは実際にはどんなものなのか」とか、環境面で「本当に芝生が育つのか」とか、そういう検証の試みが、学界や実務家たちのあいだで、もつとあってもよかつたのではないかとは思います。

基本設計案の発表後に、我われはかなり集中的に情報収集とコミュニケーション

### 専門家の役割——幾つかの位相から

**中村** 一連の問題について、市民からは、個人からも、運動としても、様ざまな声が上がつたと思います。でも、専門家はそうした意見や社会の動きを十分にくみ取れたのか。そもそも専門家同士の議論は深まつたのか。ともに不十分だったと思います。

**榎**

日本も黙つていらない社会になつて

きたのは心強いことです。ただ、今回は国家プロジェクトだったため、形のある自治体の顔のある市民というものが想定

を行なつて、様ざまな懸念を示しました。それは評論ではなくて、自分たちなりの分析と提言をしたということです。

複数のグループが意見交換の場をもつて、もう少し早く分析が進んでいたら、「もう時間がありませんから」という第二幕にはならなかつたかもしれません。分析として、巨大都市開発の動きも見ておいたほうがよいと思います。

**中村** 東京都は神宮外苑地区の関係権利者と、二〇一五年の春に再開発の基本覚書を交わしたそうです。競技場問題の背景として、巨大都市開発の動きも見ておいたほうがよいと思います。

**榎** コンペの審査委員を務めた鈴木博

之さんも、外苑の景観は時代とともに変化を遂げているとおっしゃつていましたが、單に新国立競技場を建設するだけではなく、一大スポーツ拠点として神宮内苑外苑一帯を違うものにしようとする流れがあります。秩父宮ラグビー場と神宮球

か、コストの点は吹っ飛んでしまいます。そのくらいの新鮮さをもつたプログラムがしつかりしなければいけなかつたといえるのではないですか。

**中村** そうですね。本来であれば有識者会議やWGの会合は、それぞれの専門家がとことん議論すべき場だった。しかし、最初にお話ししたように、本質的なペだとと思つたら間違います。プログラムが間違つていたら、コンペとしては一流ではないですよね。

だから、「A案、B案どっちがいいですか」という質問に、私は興味はありませんでした。一流の建築家と一流の施工会社が組むのだから、これは一流のコンペだと思つたら間違います。プログラムの責任」と言われてきましたが、色々なレベルでの専門家、専門性が存在すると思うのです。そのなかで日本では技術官僚は細部を、行政官僚が大所高所から考えるという構図がずっとあるように思います。その構図の上で、技術の専門家がきちんととした発言の機会を与えられず、都合のいいところだけ主張をつまみ食いされることが続いているのではないでしょうか。

一方で専門家や技術者は、「ムラ」をつくって、利益集団化している。たとえば、せっかく斬新な建築ができるチャン

にて、有識者会議にも、暗黙の了解のようないものがあつたのではないかと思います。大野 都市開発の規制緩和の流れは二一世紀に入つて、強まって、東京でいえば、神宮外苑、代々木公園、皇居、東宮御所とつながる貴重な大緑地帯ですら、一般の市街地と同様に開発対象とします。特区を活用して、今や路上にさえ建築がつくられています。

都市再開発、あるいは今回のよだな大型公共事業が経済を牽引するエンジンだという考えは、やはり根強いですが、先ほどから申し上げている人口減少、さらに公的債務がGDPの二三〇%にも達していることを考えれば、少しの負債であつても、未来世代への大きな負担になります。特区を活用して、今や路上にさえ建築がつくられています。

榎 建築の維持費の問題もありますが、社会保障政策をきちんと実行していくのが、単に新国立競技場を建設するだけではありません。

榎 実は、昨年、二〇年近く前に設計した横浜市のコミュニティセンター（横浜市

篠原地区センター・地域ケアプラザ)の近くまで行く機会があつたので、どのように利用されているか見てみようと思つて、夕方センターを訪れたのです。予想外だったのは、二〇年前に設備の一つとして設計した高齢者のためのスペースがほぼ満員で、非常に利用率が高いことでした。介護士の方によると、その日の利用者の平均年齢は九三歳、およそ七割の人は認知症患者のことでした。二〇一五年に、既にこういう現実があるわけです。

## 都市の象徴

中村 我わがが今回、横さんの問いかけに共感したのは、都市の中の、誰もが自由でいられる空間、オープンスペースの重要性を再認識したことも大きかったと思います。緑や公共空間は社会資本であって、それがあることによって都市の魅力、価値が高まる。この点をしっかりと伝えたいとの思いをもつていました。

二〇五〇年の社会、二〇七〇年の社会に、大野さんの言われたような負債では

篠原地区センター・地域ケアプラザ)の近くまで行く機会があつたので、どのように利用されているか見てみようと思つて、夕方センターを訪れたのです。予想外だつたのは、二〇年前に設備の一つとして設計した高齢者のためのスペースがほぼ満員で、非常に利用率が高いことでした。介護士の方によると、その日の利用者の平均年齢は九三歳、およそ七割の人は認知症患者のことでした。二〇一五年に、既にこういう現実があるわけです。

なく、遺産となるものを残してゆかなければならぬと思います。

大野 この競技場問題でもそうでした。が、都市の価値というとき、建替えではなく改修によって新しい価値を創造する、それが日本ではなかなか選択肢にならないもどかしさがあります。二条城でサミットを行なうのが世界の常識なのに、政府は二〇〇五年に京都御苑の中に新しい迎賓館をつくりました。新築を喜ぶ文化の根は考えられている以上に深いと想います。

私は、壊してしまった古い国立競技場を改修して使うべきだったと今でも考えています。一九六四年の東京五輪のための競技場は、名作の誉れ高い建築です。それは、成長期の日本を見事に象徴したデザインでした。もしも、クリエイティブな改修国立競技場が誕生していたら、縮小期を巧みに運営する日本を建築として象徴できたのではないかと悔やまれます。

横 やはり、今日の都市の文脈、社会

の状況をふまえたとき、必然的に、少ない公共施設が利用者の減少、維持管理の困難に直面することになると思います。そのときに、施設の一部でも、住民が参加し、そのあり方を議論して運用する、住民参加型の広場をつくることもあります。あなたの都市の象徴とは何ですか、と各国の人びとに聞いたら、様ざまな答えが返ってくると思います。歴史的な大聖堂、モスク、宮殿、図書館、美術館、競技施設、鉄道駅……それらは誇りの象徴と言えるのかもしれません。三年前にエッセイを書くきっかけとなつた新国立競技場案は、こうした誇りや歓びを人びとに与えるものとは程遠い案でした。

でも、これから都市の象徴となるのは何かと問われると、案外、施設や建築ではなく、人びとの深い関わりあいをつくりだす広場なのでないかとも思つていいます。

——本日はどうもありがとうございました。  
(聞き手・編集部 堀由貴子)